

ブラームス：ヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲イ短調 Op.102

ヴァイオリンとチェロのように複数の楽器が独奏をつとめる協奏曲は、バロック時代や古典派の時代にはよくみられたが、19世紀ロマン派のヨハネス・ブラームス（1833-1897）の時代には独奏パート一つが主流であった。ブラームスが「二重」協奏曲を書いたのは古典に強い関心を抱いていたことも無関係ではないが、直接のきっかけとなったのは、二人の親友、ローベルト・ハウスマンとヨーゼフ・ヨアヒムの存在だった。

ハウスマンはブラームスの「チェロ・ソナタ第2番」を初演した名チェリストで、ヨアヒムが率いる弦楽四重奏団のメンバーでもあった。ヨアヒムは、ブラームスの「ヴァイオリン協奏曲」に助言を与えたことであまりにも有名な、当時の音楽界を代表する名手である。彼らに触発され、また助言を得ながら作曲が進められ、初演は1887年10月、ケルンでブラームス自身の指揮、二人の独奏者とともに行われた。

第1楽章 アレグロ イ短調 曲が始まってまもなく独奏チェロと独奏ヴァイオリンのカデンツァ風の楽句が入るのは型破とみえるが、すでに彼が「ヴァイオリン協奏曲」で試みた手法だった。二重のソロがオーケストラと一体になって音楽を構築する。

第2楽章 アンダンテ 二長調 ホルンと木管の呼びかけに応じて、弦が表情豊かな主題を歌い出す。

第3楽章 ヴィヴァーチェ・ノン・トロツポ イ短調 はじめに独奏チェロ、独奏ヴァイオリンが主題を奏し、オーケストラを巻き込んでいく。

遠山菜穂美

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン、独奏チェロ

※スコア上の表記

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。